

西尾実と道元 (IV)

杉 哲

Nishio Minoru and Dogen (IV)

SUGI Satoru

(Received October 1, 2007)

1. 道元の受容

本稿は、西尾実国語教育論の生成過程を明かにしていく試みの一つである。西尾実が自らの国語教育論を構築していく上で、道元の存在は大きなものがあった。それだけに、西尾実国語教育論研究において道元受容に関わる先行研究は、少なくない¹⁾。だが、調べ得た範囲では、西尾実における道元体験の出発点である村上専精の講義との関連には、研究の手が届いていない。未開拓の研究領野である²⁾。

西尾実の著作目録に関わる調査は、西尾光一・近藤健「西尾実著作目録」(『西尾実国語教育全集』第10巻 教育出版 昭和51年6月21日)が、もっとも詳しい。

「西尾実著作目録」は、「凡例」によると、「西尾実の著作」を、つぎの7類に分けて標示している。

- 1 著書
- 2 編著・校訂書
- 3 講座・全集・単行本等所収論文
- 4 雑誌所収論文
- 5 講義テキスト・教科書・指導書等
- 6 講演記録(印刷されたもの)
- 7 その他(新聞記事・月報)

「西尾実著作目録」に従い、西尾実の著作について内部徴証を行った。その結果、西尾実の著作において道元が主たる題材の一つであると認められるものは、つぎのとおりであった。

上記7類について、「4 雑誌所収論文」と、それ以外とに二分割して提示する。

最初に、「4 雑誌所収論文」の部をとりあげる。「雑誌所収論文」では、西尾実の著作において、道元が主たる題材の一つであると認められるものは、合計28本であった。以下に、論文題名、所収誌名、発行年月の順に掲げる。なお、発行年月は時系列を明確にするため、すべて西暦表示に統一した。

・「自」という文字(『信濃教育』1913年12月)

- ・道元禅師(『信濃教育』1914年3月)
- ・道元禅師(下)(『信濃教育』1914年4月)
- ・愛語(『信濃教育』1914年8月)
- ・ひとりごと(『信濃教育』1918年1月)
- ・学徒勤労働員教育(『日本語』1944年10月)
- ・道元遺著における文芸性——典座教訓についての考察——(『文学』1946年3月)
- ・ふたりの留学者(『展望』1946年8月)
- ・道元の愛語について(『文学』1947年4月)
- ・道元遺著の放つ光輝(『道元』1950年4月)
- ・中世文学における道元(『日本文学』1959年7月)
- ・国語学習の基本(4)(『国語通信』1959年11月)
- ・道元禅師に学ぶ(『曹洞宗報』1960年12月)
- ・道元禅師に学ぶ(2)(『曹洞宗報』1961年1月)
- ・道元禅師のことば(『大法輪』1961年2月)
- ・道元に関するひとつの試論——「中世的なもの」の源泉として——(『文学』1961年6月)
- ・炊事の心——道元の典座教訓を読んで——(『誠心』1962年3月)
- ・中世文学と道元に関する覚書(『国文学攷』1962年5月)
- ・[座談会]「道元禅師」研究(『大法輪』1963年3月)
- ・[座談会]「道元禅師」研究(続)(『大法輪』1963年4月)
- ・正法眼蔵の文体的特質(『文学』1963年5月)
- ・道元の「愛語」(『言語生活』1964年1月)
- ・正法眼蔵現成公案の構想(『文学』1964年9月)
- ・道元のことば(『大法輪』1970年1月)
- ・道元遺著の日本文学における位置と意義(『大法輪』1971年1月)
- ・道元の四摂法と言語文化の学習(『国語の教育』1971年11月)
- ・森下二郎の自己革命とその意義(『信濃教育』1972年8月)
- ・道元のことば(『ちくま』1974年1月)

つぎに、「4 雑誌所収論文」の部以外の状況は、以

下のものであった。道元が主たる題材の一つであると認められるものは、合計15点を数える。以下に、出典を、発行年順に掲げる。発行年は、前と同じ理由で、西暦表示に統一した。

- ・国語国文の教育（古今書院1929年）
- ・国語の教育（岩波書店1932年）
- ・国語教室の問題（古今書院1940年）
- ・伝統文化の課題（刀江書院1949年）
- ・言語教育と文学教育（武蔵野書院1950年）
- ・私たちはどう生きるか（ポプラ社1959年）
- ・中世的なものとその展開（岩波書店1961年）
- ・道元の愛語について（講演／全国国語教育研究協議会研究集録1961年）
- ・道元の「愛語」について（講演／長野県上伊那国語教育研究会1962年）
- ・正法眼蔵弁道話他・正法眼蔵随聞記〔古典日本文学全集14〕（筑摩書房1962年）
- ・道元から世阿弥へ（河出書房新社1962年）
- ・道元と世阿弥（岩波書店1965年）
- ・正法眼蔵・正法眼蔵随聞記〔日本古典文学大系81〕（岩波書店1965年）
- ・道元（早稲田大学出版部1966年）
- ・人間とことばと文学と（岩波書店1969年）

西尾実の著述活動において、公刊された最初の著作は、森下二郎編著『細道』（明治44〔1911〕年11月／発行兼印刷人 森下二郎）に収められた「人民の敵を讀みて」と「約翰伝を讀む」の二点である⁽³⁾。西尾実は、この年（1911年）以降、亡くなる年の昭和54（1979）年まで、70年近くもの期間、絶えることなく著述活動を続けた。

西尾実の著述活動の中に、彼の道元関係著作を置いてみよう。そこから分かることは何か。少なくとも、つぎの二点は指摘できようか。

一つに、西尾実の著述活動の出発期から晩年まで、道元への関心が途絶えることなく続いていることである。このことは、道元に関わる論考が「『自』という文字」（『信濃教育』1913年12月）に始まり、最後の「道元のことば」（『ちくま』1974年1月）まで、途絶えることなく続いているところに端的にあらわれている。

今一つは、道元に対する接近の仕方である。接近の仕方は、大別して五類に分けることができる。精査は今後の課題としたい。

- (1) 人生論——体験・省察——
- (2) 言語論——実存・機能・構造——
- (3) 日本文学史論——文芸性・中世文学の源泉——
- (4) 言語文化論——人間的構造——

(5) 国語学習論一力としての立場一

2. 道元研究史との対峙

西尾実の道元論の深度は、どうであったろうか。

つぎに、西尾実の道元理解について研究史との関わりにおいてみてみよう。まずは、思想史における仏教の動向を押えておこう。

明治末の仏教は、どのような状況に置かれていたのだろうか。この間に対して「仏教が明治の思想史においてももっとも実り豊かな展開を示したのは、日清・日露の戦争間、ちょうど世紀の変わり目の約10年間（1894～1905）である。」とされる。

仏教が明治の思想史においてももっとも実り豊かな展開を示したのは、日清・日露の戦争間、ちょうど世紀の変わり目の約10年間（1894～1905）である。啓蒙から自由民権へと展開した政治の季節が終わり、人々が内面の問題に心を向けるようになった時期である。この時期を明治思想史の大きなピークと見るならば、明治思想史は政治思想史としてよりも、宗教思想史、なかんずく仏教を中心に見なければならぬであろう（末木文美士『近代日本の思想・再考1 明治思想家論』トランスビュー 2004年6月20日9～10頁）。

このような思想史状況の中、道元研究はどのように進展していったのだろうか。道元の研究史をみてみよう⁽⁴⁾。

最初に、鏡島元隆「道元禅師研究の回顧と展望」（『文学』1961年6月号）をとりあげる。

明治以後の道元禅師に関する研究は、大別して二つの潮流に分けられる。一は、700年の伝統を負う宗門の学者によってなされた研究であり、一は、宗外の哲学、文化科学、自然科学の学者によってなされた研究である。これらの二系統はそれぞれ別個の潮流として、対立し、あるいは、交流して輝かしい進展を示し、なお、前進しつつあるが、今、これを思想的、歴史的、書誌学的の三分野に分けて、それぞれの領域における研究の歩みを回顧しながら、その問題点を尋ね、かねて、将来の動向を展望してみよう（109頁）。

「回顧」記述の中で、「思想的、歴史的、書誌学的の三分野」のうち、「思想的」研究の分野について、それもとりにわけて、つぎの記述に注目したい。

宗門の道元禪師研究が明治から大正にかけて、提唱風の訓詁注釈の伝統を守っている時、道元禪師研究の黎明は、宗外の一文化史家によってもたらされた。和辻哲郎博士の「沙門道元」(『日本精神史研究』大正15年)がこれである。和辻博士の「沙門道元」の出現は、それまで宗門に閉じこめられていた道元禪師を初めて宗外に解放した輝かしい業績である。和辻博士以前に、宗外で道元禪師を論じたものには、村上専精博士(『仏教統一論』明治34年)と大川周明博士(『日本文明史』大正10年)とあるが、それは広く世間の関心と呼ぶまでにいたらなかった。が、和辻博士の、ロマンティズムの香り高い流麗な文章に彩られた「道元」はまさしく新しい道元研究の燭光であり、その後に出た道元禪師研究の道標である(110頁)。

和辻哲郎の「沙門道元」(『日本精神史研究』)が、「道元禪師研究の黎明」をもたらしたという。時は、大正15(1926)年である。道元について「広く世間の関心と呼ぶ」ようになるのも、和辻哲郎「沙門道元」(『日本精神史研究』)刊行以降のことだとされる。

この間の事情について、今少しみてみよう。大久保道舟「道元禪師讃仰の歴史的回顧」(『修訂増補 道元禪師傳の研究』筑摩書房 昭和41年5月10日)は、つぎのように述べている。

(引用者注—明治)39年には福山白麟氏が多大の衣資を捨てて裏の本山版眼蔵中未刊の伝衣・仏祖・嗣書・自証三昧・受戒等の五巻を開版し、ここに本山版の完璧を期したこと、また42年弘津説三氏が『承陽大師聖教全集』3巻を編集して禪師の遺書の集大成を遂げたこと、さらに大正2年神保如天・安藤文英の両氏が『正法眼蔵註解全集』10巻を纏めて眼蔵の註解研究書の大編纂を達成したこと等は、宗学研究上特筆すべき事柄である。斯して宗学の研究は明治の中葉より大正の初期にかけて著しく進展したが、これは恐らく明治35年が禪師の650回大遠諱に相当していたため、これを記念せんとする法孫のくさぐさの美挙がこの隆盛をもたらしたものと推察される。(略)

斯うして宗学研究の機運は漸く新たなる方向に向けられたのであるが、この動向に大いなる刺激を与えたものは、大正15年10月和辻博士によって著された『沙門道元』(日本精神史研究所収)であった。宗門と何等のゆかりもない博士が、当時一般社会はもとより、宗門人すら閑却していた禪師道元の行学に関し、殊に難解の書といわれた正法眼蔵について最も清新なる哲学的解明を加えられたのであるから

心ある宗門の学匠達は大いにこれに驚嘆し、宗学に対する新研究の必要を痛感したのであった(496～497頁)。

先に述べたように、西尾実において、道元に関する最初の著作は、「『自』という文字」(『信濃教育』1913年12月)であった。研究史に照らすと、道元の名前が「広く世間の関心と呼ぶ」ようになる十余年も、以前のことである。

また、道元にかかわる西尾実の著作は、本論考だけではなかった。大正15(1926)年10月に和辻哲郎の「沙門道元」(『日本精神史研究』)が世に出るまでに、西尾実は道元に関わって四本の報告を行っている。

- ・道元禪師(『信濃教育』1914年3月)
- ・道元禪師(下)(『信濃教育』1914年4月)
- ・愛語(『信濃教育』1914年8月)
- ・ひとりごと(『信濃教育』1918年1月)

このように道元研究史においてとらえると、西尾実の道元への関心は、きわめて早かったことがわかる。西尾実は、いうまでもなく「宗門」の外の人である。「宗門」の外の人がこのような時期に、このような関心の働かせ方をしたのか。それはなぜか。おいおいとその理由を求めていこう。

ついで、池辺実「道元関係研究文献目録」(『文学』1961年6月号)をとりあげる。本目録は、昭和35(1960)年までの道元関係研究文献を四類に分けて収載している。四類は、つぎのとおりである。

1. 道元撰述書の注解書
2. 道元の伝記に関する著書
3. 道元研究書
4. 道元研究雑誌・講座論文

本目録には、西尾実の著作は計14点が掲載されている。「3. 道元研究書」の類2点と「4. 道元研究雑誌・講座論文」の類12点、計14点である。繰り返すことになるが、本目録の対象は、昭和35(1960)年までに発表された文献である。西尾実の著作も例外ではない。

二類計14点の内訳は、つぎのようになっている。「3. 道元研究書」の類2点から掲げる。

- ・伝統文化の課題(刀江書院 1949年)
- ・日本文芸史における中世的なもの(東京大学出版会 1954年)

つぎに、「4. 道元研究雑誌・講座論文」の類12点を掲げる。

- ・道元禅師（『信濃教育』1914年3月）
- ・道元禅師（下）（『信濃教育』1914年4月）
- ・愛語（『信濃教育』1914年8月）
- ・道元遺著における文芸性——典座教訓についての考察——（『文学』1946年3月）
- ・ふたりの留学者（『展望』1946年8月）
- ・道元の愛語について（『文学』1947年4月）
- ・道元遺著の放つ光輝（『道元』1950年4月）
- ・中世文学における道元（『日本文学』1959年7月）
- ・中世文学の展開（『講座日本文化研究7』1959年10月）
- ・世阿弥芸論の特質（『観世』1960年9月）
- ・道元禅師に学ぶ（『曹洞宗報』1960年12月）
- ・道元禅師に学ぶ（2）（『曹洞宗報』1961年1月）

このように、池辺実「道元関係研究文献目録」には、西尾実の道元関係の論考が合計14点掲載されている。決して少なくない数である。ここには道元研究者としての西尾実の確かな姿がある。「姿」の内実の解明が急がれる。

最後に、西尾実の道元論と国語教育との関係についてみておこう。西尾実の道元論は、その多くが「愛語」とのかかわりにおいて国語教育の領野に導入された。石井庄司「国語教育思潮の源泉としての『正法眼蔵』」（『文学』1961年6月号）に一つの証言がある。

わたしがはじめて道元禅師の「愛語」について知ったのは、西尾先生が講座に書かれたもの（引用者注一『国語国文講座』文献書院）と、五十嵐力博士のもの（引用者注一『国語の愛語』昭和3年）とであったと思う。しかし、国語教育界に深く印象づけられたのは、西尾先生の書かれたものであって、たびたび出てくる。特に戦後は、昭和22年4月の『文学』誌上に「道元遺著の文芸性」として「愛語について」の論文がある（『伝統文化の課題』昭和24年刊、所収）。（略）

西尾先生の『国語国文の教育』（昭和4年刊）は、はじめに「方法的体系」として、「行的方法」「基礎経験」「読む力の基礎」という点から「読む作用の体系」を「素読、解釈、批評」の三つにわけて考察されてきた。それを「文学形象の問題」として「文の主題とその展開」（主題、構想、叙述）の三方面から改めて考察し、次に「国語の愛護」の見出しのもとに「言語生活」（196ページ）の考えを進め、「ことば」のことから、道元の「愛語」を引きだし

て来られた。そして、フィヒテの「独逸国民に告ぐ」の所説などと比較しながら、国語教育の新しい面を開拓されたのであった。『国語国文の教育』の国語教育史における意味は重要なものがあるのであるが、その一つは、このような「愛語」の基礎づけがあったからといってもよいと思われる（72～73頁）。

3. 記憶としての道元体験

西尾実と道元との出会いは、東京帝国大学文科大学における村上专精の講義での出来事であった。大正元（1912）年のことである⁶⁵。

村上专精とは、いかなる人物か。村上专精の生涯は、つぎのように概観できる。

村上专精は、丹波国氷上郡船城村（兵庫県氷上郡春日町）にて、寺の住職の子として、嘉永4（1851）年4月2日出生。明治23（1890）年、東京帝国大学より印度哲学の講師を嘱託される。大正6（1917）年、安田善次郎の寄付による印度哲学講座担当の教授に就任し、大正12（1923）年に退職。大正14（1925）年、大谷派の耆宿に任ぜられる。大正15（1926）年、大谷大学長となる。昭和4（1929）年に逝去。

（『村上专精年譜』村上专精著・太田吉麿新校監修『新編仏教統一論』群書平成9年7月13日）

村上专精の人と仕事は、概観の上に、つぎのように報告されている。

村上专精（1851-1929）の伝記は、『仏教統一論』第五篇・実践論下（1927）に付載された「自伝」に詳しい。村上はそこで、自らの生涯を振り返り、六期に分けている。

村上は丹波の真宗大谷派の末寺に生まれ、同国に幼時を過ごしたが（少年時代）、18歳で播磨に遊学、後、越後・京都・三河に学んだ（青年時代）。明治13年、再び京都に留学して以後、研究と教育に進み（壮年時代初期）、明治20年には曹洞宗大学講師となって、活動の場を東京に移した（壮年時代中期）。明治29年には東本願寺改革運動に関わり、さらに大乘非仏説論をとがめられて、明治34年に大谷派の僧籍を離脱（壮年時代後期）。同44年に復籍後、教育に尽力している（老年期）。

この間、明治23年から東京大学に講師として印度哲学を講じ、大正6年、安田善次郎の寄付による

印度哲学講座の初代の主任教授に就任、同12年に退職している。村上によって、まさに帝大アカデミズムにおける仏教研究が確立されたのである。(略)

村上専精が講師になることによって、東京帝国大学の仏教研究は新たな段階を迎える。それは史料の学問的な処理に基づく歴史的研究である。それによって、仏教研究は自然科学の実験と結びつくものではなく、人文科学における歴史的な実証の方向に進むことになる。

(末木文美士「講壇仏教学の成立・村上専精」
『福神』第4号 2000年6月13日 36～37頁)

道元との出会いは、西尾実に大きな「感激」を与えた。西尾実は、後年、往時を振り返って、「感激」の大きさについてこう述べている。

私は大正元年に東大の国文科に入りました。ところが、実は何か楽しい講義が聞かれるものだと思って入学してみると、それは私自身に準備がなかったからですけれども、実につまらなくて、国文以外のものばかり聞いたのです。その中に村上専精先生の仏教講座、安田家か何かで寄付して、それで初めて開かれたので、日本仏教史の講義が続いたのです。それで、それを伺っている間に道元禅師のことが出て、これは今でも一言一句忘れないところがあるほどひどく感激して、道元禅師という人に打たれたわけです。これは道元禅師の生涯を道元禅師のお書きになった弁道話とか学道用心集とか、あるいは普勅座禅義というような文句を引いてお話下さったのですが、それで初めて正法眼蔵という本の名前を聞いたわけです。しかしそのころ正法眼蔵は決して読みはしなかった。私は道元禅師の伝記やそういう関係のものを図書館で読んで、たしか大正3年に私の郷里の信濃教育という雑誌に「道元禅師」というのを3月号と4月号に書いたほど感激したのです。

(西尾実「道元禅師、研究」『大法輪』昭和38年3月27頁)

道元との出会いの「感激」の大きさは、回想の中で、西尾実がくり返し幾度となく語っているところにも、よくあらわれている。西尾実の回想の中から、時間軸に沿って4例を掲げる。いうまでもないことだが、文中の「わたし」は、すべて西尾実のことである。

①わたしが、道元の存在に心ひかれるようになったのは、東大国文学科在学中、故村上専精博士の日本仏教史の講義を聴いたことにはじまっている。

(「中世文学と道元に関する覚書」『国文学攷』

昭和37年5月 113頁)

②わたしが学生時代、仏教学の村上専精先生が日本仏教史の講義をして、その中で道元に触れたのを聞いて、わたしは道元という人にひどく打たれた。

(「道元」『日本の思想家Ⅱ』早稲田大学出版部
昭和41年12月 69頁)

③道元という名前を印象深くわたしの心にとどめたのは、大正元年、東大日本仏教史の講義で、村上専精講師の講義を聞いた時であった。

(「道元遺著の日本文学における位置と意義」
『大法輪』昭和46年1月 47頁)

④わたしが道元をはじめて知ったのは、村上専精先生の日本禅宗史の講義を聞いたときで、その講義は非常に感銘がふかく、今も、その一言一句、忘れがたい印象を残しています。

(『教室の人となって』国土社 昭和46年2月5日
117～118頁)

西尾実の発言は、いずれも後年の回想である。しかし、時間を隔てても、記憶には揺らぎがない。主張は一貫している。就中、4番目の引用に注目したい。「その講義は非常に感銘がふかく、今も、その一言一句、忘れがたい印象を残しています。」とある。「今も」の「今」とは、西尾実「80歳」の時点である。

「その一言一句、忘れがたい印象」とは何か。いま少し、西尾実の回想に耳を傾けてみよう。先に掲げた四番目の引用文献には、このことについては、それ以上の言及はない。そこで、「その一言一句、忘れがたい印象」に係る回想例の一つとして、つぎの資料を掲げる。

わたしが、道元を知った最初は、学生として、故村上専精博士の講義をきいた時であった。村上博士が「日本仏教史」の講義で、道元を講じられたなかで、弁道話の一節として、

予、発心求法よりこのかた、わが朝の遍方に知識を訪ひき。ちなみに建仁の全公をみる。相したがふ霜華、すみやかに九廻を経たり。いささか臨済の家風をきく。全公は、祖師西和尚の上足として、ひとり無上の仏法を正伝せり。あへて余輩のならばべきにあらず。

予、かさねて大宋国におもむき、知識を両浙に訪ひ、家風を五門にきく。つひに、大白峯の浄禅師に参じて、一生参学の大事、ここにをはりぬ。それよりのち、大宋紹定のはじめ、本郷にかへり

し、すなはち弘法救済をおもひとせり。なほ、重担を肩におけるがごとし。

という箇所を引用せられた。きわめて短い章句ではあるが、まさに、全生命を傾け尽くして体得した一大真理を開示しようとして、その経路を感慨深くふりかえっている三十歳の道元禪師の緊張が、ありありと感銘せられたことは、村上博士の語調とともに、三十数年後の今日まで、記憶に新たななるものがある。

(西尾実「道元遺著の放つ光輝」『道元』昭和25年4月2～3頁)

村上専精の講義の中から「その一言一句、忘れがたい印象」として想起されたものは「弁道話の一節」であった。「弁道話」は道元の著作である。「弁道話」の内容と意義について、先行研究はつぎのように説いている。

95巻『正法眼蔵』では第一とする。寛喜3年(1231)8月15日、道元32歳のとき、深草であらわされたもの。安貞元年(1227)の『普勸座禪儀』につぐ著述で、比叡山の天台宗や建仁寺の黄龍派の禪に対して道元が自分のつたえたものこそ仏祖正伝の法であることを表明した立宗宣言ともいべきものである(菅沼晃編『道元辞典』東京堂出版 昭和52年11月30日)。

西尾実は、「弁道話の一節」について「全生命を傾け尽くして体得した一大真理を開示しようとして、その経路を感慨深くふりかえっている三十歳の道元禪師の緊張が、ありありと感銘せられた」と反応している。「三十歳の道元禪師の緊張」の息吹に感応する。ここには道元その人への畏敬の念がある。西尾実の「感銘」には、一つに「人」の発見があった。

加えて、その「緊張」は「きわめて短い章句ではあるが」、「ありありと感銘せられ」るほどに、読み手に届くに十分な表現として見事に結晶化されているとする。西尾実の「感銘」には、二つに道元の文章のもつ文体の魅力があった。そして、それを一層効果あるものにしたのが「村上博士の語調」であった。

「感銘」と「村上博士の語調」は、また、つぎのようにも記憶されている。

道元の遺著にはじめて接したのは、大正初年であった。しかし、仏教に関する知識の乏しかったわたしには難解で歯が立たなかった。でありながら、その中のある部分は、わたしの心を深くとらえて忘れがたい。一読しただけで心に深く刻まれ、知らな

い間に暗誦してしまっているところもある。わけても彼の正法眼蔵その他の中に記されている自伝的表現は、感銘深く彼の生涯の一こま一こまを刻みつけるとともに、彼が身をもって参究した人間の真実を浮き彫りにして余すところがない。たとえば、「正法眼蔵弁道話」の

予発心求法よりこのかた、わが朝の遍方に知識をとぶらひき。ちなみに建仁の全公をみる、あひしたがふ霜華、すみやかに九廻をへたり。いささか臨済の家風をきく。全公は、祖師西和尚の上足として、ひとり無上の仏法を正伝せり、あへて余輩のならぶべきにあらず。

予かさねて大宋国におもむき、知識を両浙にとぶらひ、家風を五門にきく。つひに、大白峰の淨禪師に参じて、一生参学の大事ここにはをりぬ。

のごとき、彼が十三歳にして比叡山に登って出家し、山上の教学に精進した末、根本的な疑問を生じて十五歳山をくだり知識を諸方に求めた末建仁寺に行つて禪を参究すること九年、重ねて二十四歳宋に赴き、二十六歳天童山如浄に謁して師資深く契い、ついに身心脱落の境に至った過程を、このようにわずかな言句に感銘深く結晶させている。わたしは、大正初年東大国文学科在学中、村上専精教授の日本仏教史の講義で、この一節が引用されたときの感動を今もまざまざと思い返すことができる。村上教授は、この最後を「一生参学の大事ここにはをらんぬ。」と結ばれた。そんなことまで今も記憶に残っている。

わたしのこのような感銘は、村上教授の講義ぶりからきているところもなくはないであろう。しかし、その後このところを読みかえすたびに、一語一句深い感動をもって記述され、一章一章感激のリズムが見事な完結をもって展開している。読む者に与える感銘の原動力は、このような真実に根ざしていることは疑う余地がない。

道元の、このような自伝的記述は、彼が四十四歳のときに書かれた「正法眼蔵面授」の中にもこういう一節がある。

そのとき道元に指授面授するにいはく、仏祖両授の法門現成せり。これすなはち靈山の拈華なり、嵩山の得髓なり、黄梅の伝衣なり、洞山の面授なり。これは仏祖の眼蔵面授なり、吾屋裏のみあり、余人は夢也未見聞在なり。

これは道元が二十六歳の七月、天童山景德寺において、はじめて如浄に謁したときの感激である。感激というよりももっと深い体験である。この体験は如浄には明らかでも、道元にはまだ、その意味がはっきりしないほど深い根本的な体験であったことが、一語一句の上にも、センテンスからセンテンス

への発展の上にも読みとれる。このとき如浄が指授し面授した「ことば」の最後をも、村上教授は「現成せり」を「いま現成」と読まれたことも記憶に残っている。そうして、この部分は、いままでわたしの目にふれた範囲では、いずれも「現成せり」である。したがって、「いま現成」は村上教授の読みとりであったとしか判断されないが、とすれば、なかなか効果的な読みとりであったといえる。

(西尾実「正法眼蔵の文体的特質」『文学』昭和38年5月 54～55頁)

「感銘」の対象は二つ。一つは「正法眼蔵弁道話」の一節。いま一つは「正法眼蔵面授」の一節。二つとも道元の著作である。両者のうち、「正法眼蔵弁道話」は先の記憶と重なる。ここで、新たに想起されたものは、「正法眼蔵面授」の一節である。「正法眼蔵面授」は、「正法眼蔵」において、つぎのように位置づけられている。

「正法眼蔵」第51。寛元元年(1242)10月、越前の吉峰寺で説かれたもの。面授は面授相承といい、師と弟子が相對して、師から弟子へと直接仏祖正伝の正法がたえられることをいう。(略)むかしから「正法眼蔵」を学ぶものは「面、現、仏」といって、「現成公按」「仏性」の巻とともに「面授」の巻を重要視し、また宗門では「授記」「嗣法」の巻とともに宗門相承を正しく示したのものとして尊重されている巻である(菅沼晃編『道元辞典』東京堂出版 昭和52年11月30日)。

では、道元の二つの著作に対する西尾実の反応は、どうであったか。「仏教に関する知識の乏しかったわたしには難解で歯が立たなかった。」としつつも、反面、「その中のある部分は、わたしの心を深くとらえて忘れがたい。一読しただけで心に深く刻まれ、知らない間に暗誦してしまっているところもある。」ほどに魅了されたという。中でも、「彼の正法眼蔵その他の中に記されている自伝的表現は、感銘深く彼の生涯の一こま一こまを刻みつけるとともに、彼が身をもって参究した人間の真実を浮き彫りにして余すところがない。」として、道元の「正法眼蔵その他の中に記されている自伝的表現」に対する驚きが披瀝されている。

西尾実の「感銘」は、かくして、「自伝的表現」に収斂していく。

「自伝的表現」の内実について、西尾実はつぎのように説明している。道元が「身をもって参究した人間の真実」という主題。「一章一章感激のリズムが見事な完結をもって展開している」の「展開」や「センテ

ンスからセンテンスへの発展の上にも」の「発展」に具現化された構想。「ついに身心脱落の境に至った過程を、このようにわずかな言句に感銘深く結晶させている」の「言句」や「一語一句深い感動をもって記述」の「記述」に示される叙述。主題・構想・叙述は、西尾実において、文学作品の意味構造を解明する解釈の方法体系であった。ここでは、主題として結晶するまでに有機的な達成を遂げた構想・叙述が文体という形で表現の前面に押し出されている。西尾実の眼は、道元の著作における「自伝的表現」のもつ文体の特質に焦点化される。その意味では、先の記憶のそれと一致している。さらに、「村上教授は、この最後を『一生参学の大事ここにをはんぬ。』と結ばれた。そんなことまで今も記憶に残っている。」と記されており、先に掲げた「村上博士の語調」への共感は、変わるところがない。

「村上博士の語調」のもと、「自伝的表現」の緊密な表現性に導かれて、「身をもって参究した人間の真実」の具現者、道元に出会う。そこには、驚きとともに、表現内容への讃嘆がある。西尾実における「人」への関心の高さが物語られていて、先の記憶に通う。

先との違いは一点。本文の「読み」の問題が、取り上げられていることである。該当箇所をあげる。「このとき如浄が指授し面授した『ことば』の最後をも、村上教授は『現成せり』を『いま現成』と読まれたことも記憶に残っている。そうして、この部分は、いままでわたしの目にふれた範囲では、いずれも『現成せり』である。したがって、『いま現成』は村上教授の読みとりであったとしか判断されないが、とすれば、なかなか効果的な読みとりであったといえる。」と。本文の「読み」の問題は、「いままでわたしの目にふれた範囲では」とあるように、執筆時、つまり回想の時点での判断である。その上で、留意したいのは「村上教授は『現成せり』を『いま現成』と読まれたことも記憶に残っている」というところ。講義の中の出来事として、授業者の「語調」にとどまらず、その内容までも記憶に留めていることである。

以上を整理すると、このようにならうか。

西尾実における記憶としての道元体験は、「人」としての道元の発見、道元の文体の醍醐味、そして道元との出会いを用意した村上専精の存在、三点に集約できよう。「知覚(現在)と記憶(過去)は共存し、相互に浸透しあっている。これが、ベルグソンの中心的なテーゼである。知覚が構成されたあとで記憶が形成されるのではなく、両者は同時に形成される。」⁽⁶⁾。「知覚(現在)と記憶(過去)」の相互浸透の軌跡の解明が、つぎの課題である。

(注)

- (1) 例えば、つぎのような論考がある。
- ・石井庄司「国語教育思潮の源泉としての『正法眼蔵』」『文学』1961年6月号
 - ・桑原隆「西尾実の『国語国文の教育』(昭和4年)までにみられる国語教育観」『国語科教育』第21集 昭和49年3月
 - ・野地潤家「国語愛の問題」『月刊国語教育研究』第84集 昭和54年5月号
 - ・池田寿一「信州教育と西尾実」『日本文学』昭和55年1月号
 - ・竹長吉正「西尾実における『行的』——その国語教育理論を中心に——」『日文協・国語教育』11号 1980年7月号
 - ・西牧 厚「『道元と世阿弥』——二人の生き方をめぐって——」『西尾実研究』教育出版 1983年7月
 - ・松崎正治・浜本純逸「西尾実における行的認識の教育論(その一)」『神戸大学教育学部研究集録』第81集 昭和63年9月
 - ・松崎正治「西尾実における行的認識の教育論(その二)」『鳥取大学教育学部研究報告』平成元年8月
 - ・小川雅子「西尾実の道元研究にみる言語生活の探究」『山形大学紀要』(教育科学)第11巻第4号 平成9年1月
 - ・吉田暁子「西尾実『道元と世阿弥』——西尾実の「ことば」と道元の『愛語』——」『国文学解釈と鑑賞』平成11年12月号
 - ・安良岡康作『西尾実の生涯と学問』三元社 2002年9月25日
- (2) 本主題にかかわる探究は、これまでにつぎの形で報告してきている。
- ・杉 哲「飯田時代の西尾実(5)」『国語科教育研究論叢』第2号 1998年3月31日
 - ・杉 哲「西尾実と道元」『熊本大学教育学部紀要』第49号 人文科学 2000年12月15日
 - ・杉 哲「西尾実と姉崎正治」『解釈』平成13年5・6月号
 - ・杉 哲「西尾実と道元(Ⅱ)」『国語国文研究と教育』第43号 平成18年2月20日
 - ・杉 哲「西尾実と道元(Ⅲ)」『熊本大学教育学部紀要』第55号 人文科学 2006年11月30日
- (3) 下條修雄「西尾実先生と森下二郎先生との出会い」『昭和57年度郷土調査部発表会要項』
- (4) 文献の選定は、「研究史(参考文献の部)」(菅沼晃編『道元辞典』東京堂出版 昭和52年11月30日)によった。
- (5) 西尾実と村上专精との出会いの時期は、大学での講義以前にさかのぼる可能性がある。どこまでさかのぼることができるだろうか。つぎの資料に従えば、西尾実と村上专精との出会いは、明治45(1912)年4月ということになろう。

(引用者注——明治43年)10月の郡下小学校校長会において、(引用者注——長野県下伊那郡の)河村郡長は、各町村青年会の村内統一および郡青設立を訓示し、次のような政府示達の「町村青年会組織標準」を示した。(略)(1)学校職員、町村役場吏員、其他地位名望ある者を名誉会員または顧問となすこと。(略)

(引用者注——明治44年の前半には郡青年組織の基盤ができあがり、郡青の組織化を前にして8月には文学博士速藤隆吉を招いて、教育会、神職合議支所が共催して飯田小学校で「団体と教育」と題して1週間講習会を行った。準備整って、11月26日、下伊那郡青年会の創立発表会を飯田小学校にて催した。(略)

(引用者注——明治45年)4月、郡青臨時総会をひらき、研究事項として基本財産造成の方法、郡内に共通する各町村青年会の事業および年度内に予定される事業の状況を検討したあと、村上专精博士、豊橋旅団長竹内武少将、同歩兵連隊長両角三郎少将の講演をきいた。

(長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編『下伊那青年運動史——長野県下伊那郡青年団の50年——』国土社 1960年7月15日23～25頁)

村上专精は、長野県下伊那郡青年会の招きにより、明治45(1912)年4月、下伊那郡飯田町にて講演を行った。他方、西尾実は明治43年3月に長野県師範学校を卒業し、同年4月より下伊那郡飯田尋常高等小学校訓導として赴任し、明治45年4月に下伊那郡大下条尋常高等小学校に転任している。止宿先は大下条村深見であった。西尾実は「学校職員」として下伊那青年会に関わっていた。飯田町は止宿先から通える距離である。このように考えると、明治45年4月の村上专精の講演を聞いた可能性がでてくる。少なくとも、村上专精の講演のことは知り得る立場にいたことは確かであろう。しかしながら、公刊された西尾実関係の資料には、本件の記述は認めることができない。

- (6) 大澤真幸「廻行的因果関係」『本』2007年10月号 4頁

<付記>

- ・引用文献の漢字表記については、新字体に改めた。
- ・引用文献の発行年は、その文献の奥付に従った。年号あるいは西暦のどちらかに一定していない。